

あなたもそこにいたのか

マタイによる福音書 27:45-56

賈 晶淳

本日は四旬節の第一週、そして今年のイースターは4月9日になります。ということで聖書はイエス・キリストの受難の箇所を、題は先ほど歌った讃美歌21の306番の題をそのまま借りました。

先ず、受難の現場にいた人々の様子から確認したいと思います。

はじめに47節です。

そこに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「この人はエリヤを呼んでいる」と言う者もいた。

そこにいた人々の中で見物人の姿です。

次は54節です。

百人隊長や一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

ここは加害者たちの姿です。

三番目は55節です。

またそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。

遠くからイエスを見守っていた婦人たちの姿です。彼女らはエルサレムから遠いガリラヤからイエスについて来た人々です。

そして、四番目はそこにいるべき人々で逃げて姿が見えなくなっている弟子たちです。マタイの編集者が弟子たちの姿を何故抜かしたのかは分かりません。

「あなたもそこにいたのか」という問いは常に私たちに向けられているように見えます。それに、「あの恐ろしいところになくてとても良かったです」と正直にいうより、「そこにいなかったことがとても残念です」と答えているのが自分ではないかと反省しています。

前回の証詞の中で韓国の詩人・朴勞解の「我、そこに立っている」という詩を紹介しました。他人のことではなく、自分自身が、今、あなたが苦しみを受けているそこに立っているということです。

身体の中心は心臓ではない
身体が痛む時痛むところが中心になる
家族の中心は父親ではない
身体の弱い人が家族の中心となる

銃口の前で人間の尊厳が踏み躪られ
良心と正義と子供たちが虐殺される場所
この瞬間そこが世界の中心だ

ああ、レバノンよ！
パレスチナよ！
独り火炎の中で震えている君

国境いと宗教と人種を超え
血に濡れているそなたのそばに

今、我、ここに立っている

今、我、そこに立っている

(訳・賈 晶淳)

この詩は私たちが立っているべきところがどこなのかを問いかけています。詩人は母親の信仰を受け継いだカトリックの信徒であり、この詩の中心は今日の讃美歌や聖書を連想させます。民族や人種、性や階級などによる差別や抑圧、疎外や排除などが起きているすべてのところが人々の中心、世界の中心となることを祈っている詩です。

詩人の名前は筆名ですが、労働者出身の詩人として名を成した人です。きっと彼の中心には劣悪な環境で働いていた労働者がいたと思います。彼は軍事政権の下で労働者団体を作ったことで拷問を受け、死刑宣告を受けます。7年間の服役の後に金大中大統領によって赦免されます。1984年に出版された詩集『労働の夜明け』は百万部以上売れるベストセラーになります。

讃美歌 306 番はアフロ・アメリカンのスピリチュアルソングです。いわゆる黒人霊歌、ゴスペルソングです。アメリカの黒人たちが奴隷制度の下で歌っていた曲です。それを知らない人の中には、贖罪信仰という抽象的で、感傷的な思いに耽り、神の御子としてのイエスの十字架の苦しみのみを想像しながら涙を流すことで満足している人もいますが、そこには黒人の苦しみが入る余地はありません。

南北戦争による不完全な奴隷解放の後の変化の一つにこのアフロ・アメリカン・スピリチュアルソングがあります。それまで教会で歌われていたゴスペルソングが教会の垣根を超え、世俗的な内容や雰囲気を持つようになります。それがジャズやブルースです。スピリチュアルの中身は変えられていません。奴隷制度の中で人間として扱われなかった戦争前の黒人たちは讃美歌を隠喩的にしか歌えませんでした。それがジャズやブルースでは直接的な表現を使えたのです。

20 世紀を代表するアメリカのジャズシンガーの中から二人の黒人女性の名を上げますと、一人はビリー・ホリデイ(1915-1959)で、もう一人がニーナ・シモン(1933-2003)です。二人の生涯は映画にもなっていますし、ユーチューブなどで簡単に彼女たちの映像や歌を見聞きすることができます。

先ず、ビリー・ホリデイが歌った「奇妙な果実」(Strange Fruit)は当時の人々に大きな影響を与えたと言われていています。

南部の木には奇妙な果実がなる

葉には血を滴らせ、根にも血を滴らせ

南部の風に揺らいでいる黒い死体

ポプラの木から吊るされている奇妙な果実

この曲に出て来る南部の木に実る奇妙な果実とは白人たちによってリンチされ、殺され、ポプラの木に吊るされている黒人の姿です。南部で日常茶飯事に起きている差別の現場をビリー・ホリデイが目撃し、歌で証言している曲です。彼女もそこにいたのです。この歌に十字架という言葉は一度も出ていませんが、黒人たちが吊るされているあのポプラの木こそがイエスの十字架であり、受難の現場に違いないと歌っているように見えます。讃美歌 306 番には直接表現が出来なかったことからこの曲よりさらに酷い状況であったと思います。

ビリー・ホリデイやニーナ・シモンが歌っている曲には信仰的表現はありませんが、苦難の現場を目撃し、具体的に証言しているところから預言者の言葉のようにも読み取れます。彼女らの曲からは「あなたもそこにいたのか」という問いと同時に「わたしもそこにいました」との告白が同時に見えるのです。

ニーナ・シモンは公民権運動にも深くかかわっていました。中でも非暴力の抵抗のキング牧師より、マルコムエックスの方が好きで、彼女が殺された子供たちや黒人たちのことを歌った「ミッシシピ・ゴッデム」(Mississippi Goddam)は禁止曲になります。歌手や詩人にとって歌や詩そのものが証言であり、歌っているところが現場であります。映画では彼女がカーネギーホールで警官に囲まれている中で敢えてこの曲を歌おうとしたため、連行されて行く場面と、死後もベッドで手錠にかけられる場面がとても印象に残るものでした。

今を生きている私たちにとって「そこ」とは、即ち現在におけるゴルゴタとは具体的にどのようなところなのか。またどのような存在としてそこに立っているのか、或いは避けているのかを想像してみます。差別や抑圧や疎外や排除の「そこ」は今も私たちの周辺のあらゆるところに存在し、弱者が、犠牲者が、苦しみの中で叫び声すらも出せない人々がいるところだと思います。加害者にならず、逃亡者にもならず、せめて見物人か目撃者、可能なら証言者になればと願いつつ、今の過ごし方を問うてみるのも四旬節における大事な日課ではないかと思えます。(2023年2月26日証詞より)